

フィーリングアーツとナラティヴ

北村 義博* 吉岡 隆之**

“Feeling Arts” as Narrative

*Yoshihiro Kitamura **Takayuki Yoshioka

*Feeling Arts Academy **Kobe City College of Nursing

キーワード

ナラティヴ narrative

アート art

イメージ image

フィーリング feeling

調和 harmony

I. フィーリングアーツについて

フィーリングアーツ¹⁾は、1981年に現代美術作家の北村義博が独自の感性と技法で創作した、絵画と光彩と音楽を融合させた体感型の統合芸術である。具体的には、「地球」「宇宙」「生命」「天上の世界」などをテーマとし、土と墨汁、金色絵の具などで描かれた抽象絵画の大キャンパスに、多彩な色調の照明がコントローラーを用いて投射され、作品に動画的な微妙な陰影の変化が生まれ、そこに心安らぐ美しい音楽や歌声がながれ、癒しの空間が出現する。体感者は「感動」「安らぎ」「希望」などの様々なフィーリングを伴って、自由に自分なりのイメージを作品に投影して膨らませることができる。いわば、体感者自身が心の筆で描く自由なアートであり、絵と光と音と人の心が対話する統合芸術である。

*フィーリングアーツ研究会

**神戸市看護大学

北村は、1989年、自身の家族が大病を患ったことを機に、病院で「痛みや苦しみ」をもつ患者やその家族の人たちに接していく中で、ここにこそフィーリングアーツが必要であることを悟り、以来、積極的に保健、医療、福祉施設や阪神・淡路大震災後の避難所、仮設住宅、復興住宅などで草の根的な公演活動を行ってきた。また、児童福祉施設や教育施設などでも公演を行い、子どもたち自身が音楽に合わせてコントローラーで調光を行ったり、体感後に感じたことを自由に絵に表現する「キッズ・フィーリングアーツ」の活動も行っている。さらに、海外においても欧米やアジアの多くの国で公演を行っており、今後は特にアジア・アフリカ方面での草の根公演活動を展開していく予定である。

これまでフィーリングアーツを体感した患者、障害者、高齢者、その家族あるいは被災者などから数々の癒しの効果が報告され、また、多くの保健、医療、福祉関連の専門職者からも「癒しの芸術」として評価を得るようになってきている。また、児童養護施設、養護学校、学童保育施設などの教育現場では「感性の教育」という意味でも評価を得るようになってきている。

学術・研究の面では、1993年に（社）生命科学振興会の初代会長、松岡英宗氏や日本保健医療行動科学会の初代会長、中川米造氏から評価と支持を得て以来、「フィーリングアーツ生命学（人間学・自然学）」（生命科学振興会主催）の講演会（1994～1995年）をはじめ、日本保健医療行動科学会学術大会（1994、2000、2002、2006年）、国際保健医療行動科学会議（1996、2001年）、日本ホスピス在宅ケア研究会大会（2001、2003年）、国際老年学会大会（2001年）、日本音楽療法学会学術大会（2002年）、アジア・太平洋ホスピス大会（2003年）、日本医療秘書学会大会（2004、2005年）など、保健、医療、福祉関連の国内外の学会や講演会で発表を行ってきた。2001年には、フィーリングアーツによるさらなる社会貢献をめざしてフィーリングアーツ研究会が発足し、その後、聖路加国際病院理事長の日野原重明氏（日本音楽療法学会理事長）、統合医療で世界的に著名なアンドルー・ワイル氏（米国アリゾナ大学統合医療プログラム・ディレクター）から評価を得て、両氏からフィーリングアーツ研究会の顧問として支援を得ている。

2004年4月より新たに、医療、福祉、教育施設などでの1000回公演をめざし、企業や学校などから支援を得て、草の根的な活動を続けている。2006年12月末現在の公演回数は262回に達し、フィーリングアーツを体験した人は延べ約1万人を超えている。

II. フィーリングアーツとナラティブ・セラピー

北村²⁾は、フィーリングアーツの癒し効果について経験的に次のように述べている。「私は感動こそ人の生命力を高めるものだと思います。痛みや苦しみをもっている患者さんやその家族の人たちが、フィーリングアーツを体感することによって、感動とともに、ありのままの自分を知り、自分を受け入れることで心が安らぎ、そして生命力が高まり自然治癒力へとつながっていくのだと思います。癒しの原点は、あるがままの自分を受け入れて不協和なものを調和させることだと思います。これは、私がアートで表現していきたいと思うものと重なっています。光があるから影があり空間がでできます。美しい部分だけではなく、影があり光があって調和があるのです。フィーリングアーツに限らず、芸術は人を癒す力をもっていると思いますが、特にフィーリングアーツは作り手の強いメッセージやストーリーがなく、体感者のイマジネーションにゆだねる部分が大きいアートなので、多くの体感者が自分の心を作品に投影しやすいという面があると思います。」

つまり、フィーリングアーツとその場に存在する全ての人、ものが響き合い、調和的空間をつくりだし、体感者は、「感動」などのプラス（快）のフィーリングを伴って自分なりのイメージを自由に描くことができ、自己受容、癒しへとつながるということである。また、体感者のイマジネーションにゆだねるということも重要であると述べている。

楡木³⁾は、ナラティブ・セラピーについて、「クライアントが悩んで治療者のところに来るのは、その個人を囲む社会的な脈絡の中で何らかの問題行動を起こす人生物語(narrative)を描いており、その葛藤で苦しむためである。だからその問題を起こしている古い筋書き(story)を別の新しい筋書きに書き換えを行おうというのが、ナラティブ・セラピーの概略である。」と述べ、その手順⁴⁾として「①クライアントが苦しんでいる人生物語を聴く」「②問題の外在化をはかる」「③別の物語に書き換える」を挙げている。

ここで、その個人の人生物語は行動を解釈した結果であり、問題を外在化して、別の物語に書き換えるということは、その行動の解釈をし直すということである。フィーリングアーツの体感によるイメージの表現は「問題の外在化」へ導き、その調和的解釈は「物語の書き換え」につながるとされる。ナラティブ・セラピーにおいて、最も困難で不可思議なところは「問題の外在化」から「物語の書き換え」のプロ

セスであると思われるが、ここでは、芸術のもつ「感動」を促す力こそが最大の利点になり得る。「感動」ではなくても「プラス（快）のフィーリング」が「物語の書き換え」に有効にはたらくと思われる。特にフィーリングアーツの場合は、体感者のイメージネーションにゆだねる（外的強制が弱い）状況と調和的空間が「問題の外在化」と「物語の書き換え」により有効にはたらくと思われる。

Ⅲ. フィーリングアーツによるイメージ表現とフィーリング

フィーリングアーツの体感によるイメージの表現とフィーリングについて、以下の2つの調査結果から述べる。

1. 大震災被災地での調査（以下、被災者調査）⁵⁾

1) 対象と方法

阪神・淡路大震災直後の1995年2月と3月に西宮市内の避難所で行われた2公演(42名)、1997年の3月～12月に神戸市内および明石市内の仮設住宅で行われた7公演(98名)、1998年に神戸市内の神社で行われた震災復興イベントでの公演(59名)においてフィーリングアーツを体感した合計199名の感想シートを分析の対象とした。これらの公演は、音楽に合わせて、北村（フィーリングアーツ創作者）が自ら照明機材を用いて、フィーリングアーツの原画（実際の抽象絵画）に三原色のライトを調光・照射するというスタイルの公演であった。対象者の年齢は14～81歳で、10～20歳代41名、30～40歳代44名、50歳以上58名、無記入56名であった。性別については男性49名、女性108名、無記入42名であった。感想シートは公演の際に体感者が記述し、形式は「感じたことを自由にお書きください」という自由記述式であった。感想シートの正確な回収率は不明であるが、フィーリングアーツ体感者のほとんどが記述していた。なお、感想シートを分析する際は個人情報の保護に十分留意した。分析方法は次の①～⑥に示した。分析①の際、百分率の検定はカイ2乗検定を用い、有意水準は $p < 0.05$ を有意と考えた。

- ①感想シートに何らかのイメージを表現していた人の割合を調べた。また、性、年齢区分、実施施設ごとに、イメージを表現していた人の割合を調べた。
- ②表現されたイメージをその内容により分類し、その割合を調べた。
- ③感想シートに記述された主なフィーリングごとにイメージ内容の割合を調べた。
- ④性（男女）ごとにイメージ内容の割合を調べた。

- ⑤年齢区分（10～20歳代，30～40歳代，50歳以上）ごとにイメージ内容の割合を調べた。
- ⑥実施施設（避難所，仮設住宅，復興イベント）ごとにイメージ内容の割合を調べた。

2) 結果

- ①199名中180名（90.5%）が何らかのイメージを感想シートに表現していた。なお，イメージを表現していた人の割合について，性，年齢区分，実施施設の違いによる有意な差は認められなかった。
- ②分類したイメージの内容とその割合（一人で複数表現の重複を含む）を表1の「全体」に示した。「イメージ有り（重複を含む）」の合計は185.0%で，およそ一人あたり2つの内容をイメージしていた。出現頻度が最も高かったイメージ内容は，森，海，山や大地，空や宇宙，季節などの「自然」で，合計83.0%であった。次いで「神仏」が21.1%，人の顔，人物像などの「人」が合計16.0%，「動物」が12.1%，「過去の出来事」が11.6%であった。「その他のイメージ」は41.2%であった。「イメージ無し」の19名（9.5%）について，16名は「絵と音がすごくきれいだった」「気持ちが落ち着いた」など感想のみの記述で，2名は「よくわからなかった」と記述し，1名は「特に何も感じなかった」と記述していた。
- ③199名中136名（68.3%）が何らかのフィーリングを感想シートに記述していた。主に「安らぎ」を記述していた人が29.1%，主に「感動」を記述していた人が27.1%，主に「希望」を記述していた人が3.0%，これらのフィーリングを重複して記述していた人が9.1%であった。このうち主に「安らぎ」を記述していた人，主に「感動」を記述していた人およびフィーリングの記述がなかった人について，それぞれ上述のイメージ内容の占める割合を表1に示した。いずれの場合も「全体」の集計とほぼ同様の傾向を示したが，特に主に「感動」を記述していた人では，「神仏」や「過去の出来事」のイメージ表現が「全体」に比べて多く，主に「安らぎ」を記述していた人では，「動物」のイメージ表現が「全体」に比べて多く，「神仏」が少ない傾向にあった。
- ④男女ごとの「イメージ有り（重複を含む）」の合計（割合）に差はみられなかった。また，性の違いによる「イメージ内容」の差はほとんどみられなかったが，男性では「人」，女性では「動物」や「過去の出来事」が相対的にやや多い傾向にあった。
- ⑤年齢区分ごとの「イメージ有り（重複を含む）」の合計（割合）には差がみられ，10

～20歳代では226.8%，30～40歳代では197.7%，50歳以上では167.2%で，年代が若いほど複数の内容をイメージする人が多い傾向にあった。また，いずれの年齢区分でも「イメージ内容」はほぼ同様の傾向であったが，特に，10～20歳代では，他の年代に比べて「自然」や「動物」がやや多く，「過去の出来事」や「人」がやや少ない傾向にあった。また30～40歳代では「神仏」がやや多く，50歳以上では「過去の出来事」がやや多い傾向にあった。

⑥実施施設ごとの「イメージ有り（重複を含む）」の合計（割合）には差がみられ，避難所では133.3%で，複数の内容をイメージする人が少ない傾向にあった。また，いずれの実施施設でも「イメージ内容」はほぼ同様の傾向であったが，特に，避難所では「過去の出来事」をイメージした人は皆無で，また他の施設に比べて「動物」がやや少ない傾向にあった。仮設住宅では「その他のイメージ」が他の施設に比べて多く，「自然」もやや多い傾向にあった。復興イベントでは「神仏」や「過去の出来事」が他の施設に比べて多かった。

2. 授業・学術会議・一般イベントなどでの調査（以下，一般調査）⁶⁾

1) 対象と方法

2001年5月から2002年6月の間に，大学や専門学校での授業，学術会議，イベントなどでフィーリングアーツを体感した合計1394名の感想シートを分析の対象とした。対象者の年齢は18～83歳で，18～19歳499名，20歳代223名，30～40歳代258名，50歳以

表1 フィーリングアーツ体感によるイメージ表現内容とその割合(%) (重複有)

	全 体 (n=199)	「安らぎ」を記述 (n=58)	「感動」を記述 (n=54)	記述なし (n=63)
自然	83.0	81.1	61.2	101.6
森	28.7	27.8	16.7	42.9
海	20.1	19.0	13.0	25.4
山・大地	14.1	12.1	16.7	12.7
空・宇宙	12.1	13.8	9.2	12.7
季節	8.0	8.8	5.6	7.9
神仏	21.1	13.8	33.3	19.1
人	16.0	15.5	18.5	20.6
人の顔	8.0	5.2	11.1	11.1
人物像	8.0	10.3	7.4	9.5
動物	12.1	17.2	11.1	11.1
過去の出来事	11.6	8.6	18.5	9.5
その他のイメージ	41.2	46.6	38.9	42.9
イメージ有り合計	185.0	182.8	181.5	204.8
イメージ無し	9.5	10.3	11.1	7.9

上86名、無記入328名であった。性別については、男性218名、女性1040名、無記入136名であった。感想シートは、上述の被災者調査と同様の自由記述欄と、新たに設けた「感動」「安らぎ」「希望」を覚えた程度を4段階（[1]非常に覚えた、[2]まあまあ覚えた、[3]あまり覚えなかった、[4]全く覚えなかった）で回答してもらう選択欄で構成されていた。感想シートの正確な回収率は不明であるが、フィーリングアーツ体験者のほとんどが記述していた。なお、感想シートを分析する際は個人情報の保護に十分留意した。分析方法は次の①～⑤に示した。分析③～⑤の際、百分率の検定はカイ2乗検定を用い、有意水準は $p < 0.05$ を有意と考えた。

- ①上述の被災者調査と同様に、自由記述欄に何らかのイメージを表現していた人の割合を調べた。
- ②選択欄の「感動」「安らぎ」「希望」をそれぞれ覚えた割合を調べた。
- ③上記①②について、性（男女）による違いを検討した。
- ④上記①②について、年齢区分（18～19歳、20歳代、30～40歳代、50歳以上）による違いを検討した。
- ⑤上記①②について、鑑賞方法による違いを検討した。鑑賞方法については、北村（フィーリングアーツ創作者）による原画（実際の抽象絵画）を使用した公演（以下、原画公演）234名、北村による原画と巨大画面DVDを併用した公演（以下、原画と巨大画面DVD公演）64名、北村による巨大画面DVDを使用した公演（以下、巨大画面DVD公演）253名、北村によるDVDを使用した公演（以下、DVD公演）551名、および北村によらないDVD鑑賞（以下、DVD鑑賞）292名の計1394名を対象とした。巨大画面DVDとは、DVDに録画されたフィーリングアーツを巨大スクリーンに放映したものであり、単にDVDとは小スクリーンに放映したものである。公演とは北村による話などを含めた双方向的なものであり、DVD鑑賞とは単にDVDを放映しただけで北村による話などは無く、一方的なものである。

2) 結果

- ①1394人中、自分なりのイメージを表現していた人は782名（56.1%）であり、感想や意見などの記述のみでイメージを表現していなかった人は538名（38.6%）であり、無記入は74名（5.3%）であった。
- ②表2には、「感動」「安らぎ」「希望」を覚えた割合をそれぞれ示した。「[1]非常に覚えた」と「[2]まあまあ覚えた」を合わせると、70.9%の人が「感動」を覚え、

80.8%の人が「安らぎ」を覚え、49.9%の人が「希望」を覚えていた。

- ③性別の感じ方の違いについて、自分なりのイメージを表現していた人の割合は、男女の違いによる有意な差は認められず、また「感動」「安らぎ」「希望」のいずれのフィーリングを覚えた割合についても、男女の違いによる有意な差は認められなかった。
- ④年齢区分別のイメージを表現していた人の割合は、18～19歳では46.7%、20歳代では61.4%、30～40歳代では62.4%、50歳以上では55.8%であった。年齢区分の違いによる有意な差が認められ ($p < 0.01$)、18～19歳で少なく、50歳以上ではやや少なかった。年齢区分別のフィーリングを覚えた割合について、「感動」「安らぎ」「希望」のいずれについても、年齢区分の違いによる有意な差が認められ ($p < 0.01$)、18～19歳で少なかった。しかし18～19歳を除いた場合、いずれのフィーリングを覚えた割合にも年齢区分の違いによる有意な差は認められなかった。
- ⑤鑑賞方法別のイメージを表現していた人の割合は、原画公演では47.9%、原画と巨大画面DVD公演では67.2%、巨大画面DVD公演では58.5%、DVD公演では72.6%、DVD鑑賞27.1%であった。鑑賞方法の違いによる有意な差が認められ ($p < 0.01$)、DVD鑑賞では極端に少なく、DVD公演ではやや多かった。鑑賞方法別のフィーリングについて、「感動」を「[1] 非常に覚えた」割合は原画公演では28.6%、原画と巨大画面DVD公演では29.7%、巨大画面DVD公演では39.1%、DVD公演では19.1%、DVD鑑賞では11.0%であり、「安らぎ」を「[1] 非常に覚えた」割合は、原画公演では42.3%、原画と巨大画面DVD公演では51.6%、巨大画面DVD公演では57.7%、DVD公演では35.9%、DVD鑑賞では28.8%であり、「希望」を「[1] 非常に覚えた」割合は、原画公演では13.2%、原画と巨大画面DVD公演では17.2%、巨大画面DVD公演では20.6%、DVD公演では11.3%、DVD鑑賞では7.2%であった。「感動」「安らぎ」「希望」のいずれのフィーリングについても、鑑賞方法の違いによる有意な差が認められ ($p < 0.01$)、DVD公演とDVD鑑賞ではフィーリングを覚えた割合が少なかった。また、各鑑賞方法について、年齢区分別に集計したところ、明らかに有意な差が認められ ($p < 0.01$)、DVD鑑賞はすべて18～19歳であり、DVD公演も18～19歳と20歳代がほとんどであった。逆に、原画公演、原画と巨大画面DVD公演および巨大画面DVD公演では18～19歳はほとんどいなかった。

表2 フィーリングアーツ体感によるフィーリングを覚えた割合 (%)

	感動	安らぎ	希望
[1]非常に覚えた	23.1	40.2	12.7
[2]まあまあ覚えた	47.8	40.7	37.2
[3]あまり覚えなかった	16.4	7.9	32.8
[4]全く覚えなかった	2.5	1.5	6.2
無回答	10.2	9.7	11.1
合計 (n=1394)	100.0	100.0	100.0

3. 被災者調査と一般調査の結果をふまえて

フィーリングアーツの体感によるイメージの表現について、主に被災者調査では約9割の人が何らかのイメージを表現しており、また、表1に示したようにイメージの表現内容も「自然」「神仏」「人」「動物」「過去の出来事」など様々であった。一般調査でもイメージを表現していたのは5割を上回っていたことから、多くの人にとってフィーリングアーツの体感には、自分なりのイメージを自由に表現する機会になり得ると考えられる。また、被災者や医療、福祉施設の患者、入所者など、比較的、「痛みや苦しみ」などを抱えている人ほど、フィーリングアーツを体感することによってイメージを表現しやすいと考えられる。これは、「痛みや苦しみ」などを抱えている人ほど感性が研ぎ澄まされているためではないかと思われる。また、性の違いによるイメージ表現の割合について、被災者調査、一般調査とも、有意な差は認められなかった。このことからフィーリングアーツの体感によるイメージ表現の有無には性差がないと考えられる。年齢区分の違いによるイメージ表現の割合については、被災者調査では有意な差は認められなかったが、一般調査では有意な差が認められ ($p < 0.01$)、特に18～19歳でイメージを表現している割合が少なかった。しかし、これは年齢による違いというより、18～19歳の約6割がDVD鑑賞（単にDVDを放映しただけで北村による話などが無い）であったことが大いに影響していると考えられる。実際、イメージ表現の割合には鑑賞方法の違いによる有意な差が認められ ($p < 0.01$)、DVD鑑賞の場合、イメージを表現していた人は3割弱と極端に少なかった。ここで、同じくDVDを用いて小スクリーンに放映した場合でも、北村による話などを含めた双方向的なDVD公演の場合、イメージを表現していた人は7割を超えていた。このことから、フィーリングアーツを単に体感するだけではなく、イメージ表現を促す何らか

のはたらきかけが重要であると考えられる。

フィーリングアーツの体感によるフィーリングについて、表2に示したように、一般調査の結果から、「[1] 非常に覚えた」と「[2] まあまあ覚えた」を合わせると、約7割の人が「感動」を覚え、約8割の人が「安らぎ」を覚え、約5割の人が「希望」を覚えていた。これらの結果から、多くの人にとってフィーリングアーツの体感は、プラス（快）のフィーリングを伴う体験になり得ると考えられる。いずれのフィーリングを覚えた割合も性の違いによる有意な差は認められなかった。このことからフィーリングアーツの体感によって各々のフィーリングを覚える割合には性差がないと考えられる。また、いずれのフィーリングを覚えた割合も年齢区分の違いによる有意な差が認められたが（ $p < 0.01$ ）、これは18～19歳でフィーリングを覚えた割合が少なかったため、18～19歳を除いた場合、年齢区分の違いによる有意な差は認められなかった。このことは年齢による違いというより、18～19歳の約6割がDVD鑑賞で、約4割がDVD公演であったことが大いに影響していると考えられる。実際、いずれのフィーリングについても、鑑賞方法の違いによる有意な差が認められ（ $p < 0.01$ ）、DVD鑑賞とDVD公演では、いずれのフィーリングを覚えた割合も少なかった。ここで、イメージの表現とは異なり、DVD公演でもフィーリングを覚えた割合が、DVD鑑賞と同様に少なかったことから、DVDを用いて小スクリーンに放映する場合、イメージ表現には影響しないが、フィーリングに影響し、原画公演や巨大画面DVD公演などに比べて、「感動」「安らぎ」「希望」などのフィーリングが伴いにくいのではないかと考えられる。

以上の調査結果から、フィーリングアーツの体感は、多くの人にとって、「感動」「安らぎ」などのプラス（快）のフィーリングを伴って、自分なりのイメージを自由に表現する機会になり得ると考えられる。また、先述したようにフィーリングアーツの体感は、自由なイメージの表現による「問題の外在化」と、「プラス（快）のフィーリング」による「物語の書き換え」の促進につながり、ナラティブ・セラピーという観点からも有効であると思われる。

ここで、フィーリングアーツの体感に伴う「感動」とイメージの表現について考える。「感動」には大きく分けると2種類あると思われる。すなわち、イメージを表現することによって得られる「能動的な感動」と、音楽や光の美しさなどによって得られる「受動的な感動」である。そして、被災者や医療、福祉施設の患者、入所者など、比較的、「痛みや苦しみ」などを抱えている人ほど感性が研ぎ澄まされているため、イ

メージを表現しやすく「能動的な感動」が得やすいと思われる。さらに、フィーリングアーツとその場に存在する全ての人、ものが響き合い、おりなす調和的空間と外的強制的な弱い状況の中、イメージが体感者自身の心に浮かんで来て、なぜそのイメージが現れたのか解釈が促され、体感者の内にある不協和なもの調和しやすと思われる。また、先述したように、イメージの表現を促すためには、フィーリングアーツを単に体感するだけではなく、何らかのはたらきかけが重要であると考えられる。この点について吉岡は「芸術としてのフィーリングアーツ自体から発せられる問いかけだけではなく、北村の、何もかも否定しない、言葉による最小限の問いかけが、その人なりの心の解釈を促し、自らの心を自ら表現することを促している」²⁾と経験的に述べている。そして体感後に自由に記載する感想シートも、自らの問題を外在化して、物語を書き換えるきっかけになり得ると思われる。

IV. フィーリングアーツ・ボランティアのナラティブ

2004年4月より新たにスタートしたフィーリングアーツ1000回公演（医療、福祉、教育施設など）では、ミュージック・セラピストやボーカル・セラピストとして、ボランティアが参加している。このフィーリングアーツを縁としたボランティアの方々のナラティブの一部を以下に紹介する。彼女たちは、いずれも、これまで100回以上、ボランティアとして公演に参加してきた。

◆松浦 綾子（フィーリングアーツ・ボーカルセラピスト、大阪スクールオブミュージック専門学校）

次のお手紙は、ホスピス（彦根市立病院緩和ケア科）で、フィーリングアーツ公演を行ったときに見に来られた一人の女性の方からいただいたものです。この方は他の患者さんに比べ、まだとても若い方でした。

「素晴らしいものを見せていただきありがとうございます。真ん中上に光り輝く星が見え、『星に願いを』の歌とリンクして、光を放つ夜空の星は、同じく希望と愛を放つ星として、全ての人々の心にも存在するというのを思い出しました。『星に願いを』は今まで何回も聴いていたのに、詞にはっきりと『心に輝く星』と歌われているのを、今回フィーリングアーツを体験しながら初めて気づきました。誰の中にも確実に存在しているこの美しい星を、多くの人々が各々の事情の曇りで隠してしまっている現実。その曇りを吹き飛ばせる素晴らしい活動をされていると思います。体と

心を病んでいる人たち、傷めている子どもたちには、特に、愛と希望の光が自分の内に存在すること、そしてそれは尊い唯一無二であるということ、自分の想いでいくらでも光を放ち、他をも照らせるということ、障害があればある程そのパワーは強くなるということに気づいて欲しいです。ハイテクを使ったアートなのに暖かみを感じられるのは、母なる大地の土が使われているからなのでしょう。CDではなく、想いの入った生の声での歌にも大いに重要な部分があるのでしょうか。私は藤紫の色が好きでした。朝焼けの空の色でした。夜明け前の『暁暗』から全てが目覚める朝へと明けていくときの色です。最後に、大切なものを思い出させてくださった皆さまと、そのご縁をくださった先生に感謝申し上げます。(灘本みどり)

公演中、この女性は、同じ病棟で、その日初めて出会ったという高齢の女性の方の手をずっと握っておられました。とてもすてきな瞳でフィーリングアーツの絵を見つめていらっしやった姿が今でもはっきりとよみがえってきます。公演の後、隣におられた高齢の女性が「『ふるさと』の歌が懐かしくて、一緒に歌いたかったけど、のどの病気で声が出なかった」と残念そうに話されると、「大丈夫、私も同じ病気だけど、絶対治るよ。手術が終わったら、また歌えるようになるから。大丈夫、絶対良くなるよ」とずっと手を取り励ましておられました。自分も重い病を抱えているのに、なんて優しく強いのだらうと思いました。同じ痛みを抱えているからこそ支え合えるのかもしれない。そのお二人の姿に胸がいっぱいになり、言葉が出ませんでした。

お二人とも、とてもすがすがしい顔をして、部屋へ戻って行かれました。フィーリングアーツを体験して、心に描かれたものはどんなにすてきなものだったのでしょうか。同じ絵を見ていても、見る人の心によって全く違う世界が映し出される。ということは、同じ現実でも、心の状態によって、全く違うとらえ方になるのだと思いました。本当の幸せは目に見えるものではなく、各々の心の中にあるのだということを教えていただきました。私にとって永遠に心に刻まれる出会いでした。

◆朝比奈逸美（フィーリングアーツ・ボカールセラピスト、大阪スクールオブミュージック専門学校）

私がフィーリングアーツ公演に参加させていただく中で、とても強く心に残っていることがあります。心の病をもつ子どもたちが入院している施設に初めて行った時のことです。建物も古く、中に入ると薄暗く、窓には鉄の柵がしてありました。子どもたちに会った時、衝撃を受けました。何とも言えない雰囲気、表情がなく、みんな自分の世界に入り込んでフタをしているように思えました。廊下を歩き回ってい

る子もいました。この子どもたちにいったい何があったのだろうか。なぜ、こんな風になってしまったのだろうか。このどうしようもない現実には戸惑いを隠せませんでした。

私は、みんなの前で歌える歌がまだ1曲しかありませんでしたが、「愛を伝えたい！歌うことで、少しでもその子どもたちの笑顔を取り戻したい！歌でひとつになりたい！」と強く、強く思い、精一杯「大きな古時計」を歌いました。その時、子どもたちと私を結び、全てをひとつにつなげていたのがフィーリングアーツでした。その空間にある全てのものが、フィーリングアーツの調和の光の世界に包み込まれ、やすらぎの中に身を委ねていました。子どもたちは、私の思いに応じてくれるかのように、その場に集中し、瞳を輝かせ、よく聴いてくれました。そしてみんな一緒に響き合っ

て歌ってくれました。子どもたちは、本当に正直で素敵でした。

子どもたちは、家族と離れて生活し、毎日、寂しいだろう。毎日、癒しきれない心の傷を抱えて……。そんな中でも、たった1曲しか歌えなかった私に「頑張って！」「ありがとう！」と言ってくれました。とても嬉しく思いました。私は子どもたちからものすごいパワーをもらいました。そのパワーは今でも私の心の支えになっています。本当にありがとう。

私は、自分の無力さを知りました。でも、「愛を伝えたい」という思いにかられて歌い、その思いに応じてくれる子どもたちを感じることができ、「こんな自分にも役にたてることがある」と希望をもつようになりました。

フィーリングアーツの空間の中で皆がひとつに繋がっていく。一人一人がそれぞれの思いを抱きながら…。全てが一回生起。明日なくなるもののように、一瞬、一瞬に心を尽くし、感謝の思いとともに生きていきたいです。



V. おわりに

今回、ナラティブとしてのフィーリングアーツについて、調査結果も交えて、「感動」「イメージ」「響き合い」「調和」など、芸術のもつ可能性を含めて述べてきた。約600年前に思いを馳せれば、ルネサンスの時代の芸術家たちも同じような思いを抱いていたのであろうか。その時代にはナラティブ・セラピーという概念はなかっただろうが、結果としての、芸術を縁としたナラティブによる癒しは、むしろ現在より多く存在していたのかもしれない。

今後とも、フィーリングアーツを縁として、体感者、ボランティア、あるいは施設の方々や響き合い、各々の眠っている感性、可能性が引き出されることを願っている。

本稿を終えるにあたり、本稿の被災者調査および一般調査において、フィーリングアーツ公演の際に感想シートを書いていただいた多くの方々に深く感謝申し上げます。また、その感想シートを分析する際にご協力いただいた神戸市看護大学（卒業生）の増田（和久）明日香氏、吉村英利子氏、倉内道子氏、田中三喜氏に厚くお礼申し上げます。さらに、本稿の「IV フィーリングアーツ・ボランティアのナラティブ」において、手紙の引用をご快諾いただいた灘本みどり氏、そのご縁をいただいた彦根市立病院の黒丸尊治氏に心からお礼申し上げます。最後に、フィーリングアーツ公演を行う場を与えていただいている多くの施設の方々、公演に参加していただいている方々、ボランティアの方々、支援をしていただいている企業や学校の方々に心から感謝申し上げます。

文献

- 1) フィーリングアーツ研究会：フィーリングアーツ公式サイト、
<http://www.e-feelingarts.com/>, 2007
- 2) 北村義博：芸術と医療：癒しのアート“フィーリングアーツ”，日本保健医療行動科学会年報，16：104-115，2001
- 3) 楡木満生：ナラティブ・セラピーの理論と実際，日本保健医療行動科学会年報，20：47-56，2005
- 4) Freedman J and Combs G: Narrative therapy: The social construction of preferred realities, 101-104, W W Norton & Company Inc, New York, 1996

- 5) 和久明日香, 北村義博, 吉岡隆之, 日野原重明:音と光と絵画の総合芸術“フィーリングアーツ”による癒しの効果に関する研究(第1報):阪神・淡路大震災後の被災者の感想の分析から, 第17回日本保健医療行動科学会大会抄録集, p50, 2002
- 6) 吉村英利子:音と光と絵画による癒しの芸術“フィーリングアーツ”の主観的効果:性や鑑賞方法による感じ方の違いについて, 神戸市看護大学看護研究演習抄録集(2002年度), 155-156, 2003